

## カメラに関する覚え書

伊丹万作

ある人が私の作品のあるカメラ・ポジションを批評して、必然性がないから正しくないといった。

私の考えではカメラ・ポジションに必然性がないということはあたりまえのことでもしも必然性などというものを認めなければならぬとしたら非常に不都合なことになるのである。

なぜならば一つのカットの撮り方は無数にあるわけで、その多くの可能性の中から一つを選ぶことが芸術家に与えられた自由なのである。したがって必然性を認めるということは芸術家の自由を認めないというのと同じことで、それならば映画製作に芸術家などは要らないことになってしまう。

カメラ・ポジション選定の過程においてもしも必然性を認めるとしたら、それは芸術家

がその主観において、「よし」と判断する悟性以外にはあり得ない。そしてその意味においてならば私は自分の作品のカメラ・ポジションには残らず必然性があると主張することもできるし（実際においては必ずしもそうは行かないが）、何人も外部からそれを否定する材料を持たないはずである。

これを要するに、カメラ・ポジションを決定する客観的必然性などというものは存在しないし、主観的必然性というものはあつてもそれは第三者によつては存在が規定されない性質のものであるとすれば、結局カメラ・ポジションの必然性というものは決して批評の対象とはなり得ないものだということがわかる。

カメラ・ポジションの選択はだれの仕事だろうか。私は多くの場合、それを監督の仕事にすることが一等便宜だと考えるものである。もしもカメラマンがあらゆるカットの目的

と存在を正しく理解し、常に必要にしてかつ十分なら画面の切り方と、内容の規定する条件の範囲において最も美しい画面構成をやつてくれることが絶対に確実であるならば、私は好んで椅子から立ち上りはしない。

どんなに優秀なカメラマンでも人間である以上、絶対に誤解がないとは保し難い。これは決して不思議なことではない。一般に一つのカットの含むあらゆる意味を監督以上に理解している人はない。

長年の私の経験が、カメラ・ポジションの誤謬を最少限度にとどめる方法は、結局監督自身がルーペをのぞくこと以外にはないということを私に教えた。

ただし、右は主として内容に即したカメラ・ポジションについてであつて、必ずしも美的要求からくる画面の切り方にまでは言及していない。

内容の目的に沿うにはすでに十分であるが同時に美的要求を満すためには、さらにポジ

シヨンの修正を要する場合がある。

あるいはカットの性質上、内容とポジションがあまり密接な関係を持たない場合がある

たとえば描写的なカットなどにおいては往々にして美的要求だけがポジションを決定する場合がある。このような部分、あるいは場合に関しては監督は一応手を引くべきであろう。

なぜならば、それらは純粋にカメラ的な仕事だから。

カメラ・ポジションの選択を監督に任せると、カメラマンの仕事がなくなりほしくないかと心配する人がある。

ところが実際において、決してそんな心配は要らないのである。試みにいま私が思いつくままに並べてみてもカメラマンの仕事は、まだこのほかに、配光の指定（これだけでも大変な仕事だ。）、「ロケーションの場合は自然光線に関する場所および時間の考慮、絞り

と露出の判断、レンズおよびフィルター  
の選択、ピントに関する考慮と測定、それ  
に付随するあらゆる細心の注意、画面の  
調子に関するくふう、セット・小道具・  
衣裳・俳優の肉体などあらゆる色調なら  
びに線の調和などに対する関心、および  
それらの質・量あるいは運動による画面  
的効果の計算、カメラの運動に関する一  
切の操作、およびそれらを円滑ならしめ  
るためのあらゆる注意、撮影機械に関す  
る保存上および能率上の諸注意、現像場  
の諸交渉・打合せ、および特殊技術に関  
する協同作業、トーカー部との機械的連  
繋、および右の諸項を通じて監督との頭  
腦的協力、とちよつと数えてみてもこん  
なにある。しかも右のうち、どの一項を  
とつて考えてみても作品の効果に重大な  
関係を持たないものはないのだからなか  
なか大変な仕事だと思わなければならな  
い。

しかも右にあげたのは撮影現場におけ  
る仕事は撮影現場だけであるが、カメラ  
マンの仕事は撮影現場

場を離れると同時に解消するという性質のも  
のではない。

平素から芸術的理解力においては常に普通  
社会人の水準から一歩踏み出しているだけの  
修養が必要なことはもちろん、専門知識にお  
いてはまた常に世界の最前線から一歩も遅れ  
ない用意が肝腎である。しかも絶えず撮影に  
関するあらゆる機械的改善を、念頭から離さ  
ないだけの熱意を持つことが望ましい。

これだけの仕事の幅と深さを謙虚な気持で  
正視している人ならば、おそらく無反省に自  
分の仕事の分野の拡大を喜ぶということはあ  
り得ないはずである。

万一、カメラのかたわらから監督を駆逐し  
ていたさらに快哉を叫ぶようなカメラマンが  
いるとしたら、その人はおそらくまだ一度も  
自分の仕事についてまじめに考えた経験を持  
たない人であろう。（昭和十二年五月二十四  
日）



れています。

辺境文庫にてPDF製本

2007年7月22日作成